

教育事業推進委員会の記録

第1回 教育事業推進委員会 記録

2002年12月10日

事業の経緯

日本動物園水族館協会（以下、日動水）では、教育事業推進委員会を中心に、文部科学省からの助成を受け、平成12年度より教育事業の推進を目指し活動してきた。平成12年度は全国の動物園・水族館（以下、園館）で実施されている教育事業の実態調査を行い、報告書「動物園・水族館における生涯学習活動を充実させるための調査研究 報告書」とCD-ROM「動物園・水族館における生涯学習活動を充実させるための調査研究 -教育プログラム共有化のための実態調査-」を作成した。作成はしたものの、現在園館職員への周知がされていないという問題もあるため、CD-ROMの内容を日動水のwebサイトに掲載をお願いする予定である（掲載済み。URL：http://www.jazga.or.jp/kyouiku_p/top.htm）。

平成13年度は、前年度の実態調査を受け、新しいプログラムの開発を行った（報告書「新しい教育モデルプログラム～動物園・水族館を利用した生涯学習の展開～」参照）。プログラム開発には学校教員2名にも参加していただいた。平成14年度は全国でワークショップ（以下、WS）を開催し、前年度に作成したプログラムの普及を目指す。WSでは、実施園館付近（ブロック）の園館職員に集まっていただき、新しいプログラムを実施しているところを見学してもらい、技術移転を図る予定である。但し、2002年11月28日ようやく文部科学省で予算が承認されたため、当初の計画では夏休み前より事業が開始される予定（北海道でも開催予定だった）だったが、短期間に凝縮して行うこととなるので注意して欲しい。また、2002年12月22日の日動水理事会にて提案通りの事業が承認された。

事業の概要

シンポジウム（以下、SS）、WS、教育方法論研究会（以下、EM）の3部構成で行う。

シンポジウム：SSの概要

SSは2003年3月15日に大手町サンケイプラザホールで実施する。ホールは300～400人程度の規模で、机をスクール形式に並べ、200名程度の参加者を集めたい。一般から150名、園館職員50名程度の内訳を考えており、園館職員と広く一般に広報したい。一般からは往復ハガキでの応募になるかもしれない。開催場所が東京なので、どうしても東京中心になってしまうが、各委員の園館や、団体などから広く公募して欲しい。

会場は13時から17時まで借りている。その他に事務局室を1室押さえてある。

パネラーを3～4人程度、内外含めて呼び、「園館の教育について」をテーマとし、報告とディスカッションを行う。園館で何ができるか、どういうことができるか、こういうことをしてもらいたい、こうすると面白いなど、園館に対する要望を世に問うものにしたい。キャッチコピーが必要だろう。

一般向けのSSであり、単に園館職員が情報を得るためのものではなく、これらの事業の成果などを広く発信することが目的である。園館の教育的機能への期待と課題を漠然と話すのではなく、ある程度具体的な話をする中で、「園館での教育はあり得ない」と思っている人に、「もしかしたら使えるかもしれない」と思ってもらいたい。どうやって園館と繋がっていけば良いの

かわからない人向けの SS となるべきであろう。そのために、パネラーは内部、外部から具体的に指摘できる人が良い。また、教育全般を語る人も必要だ。既存の園館人や学者は避けたいと考えている。児童文学などについて詳しい方も良いだろう。知らない人と知っている人でディスカッションを行うというのも面白い。もちろん、一連の WS の報告を行っても良い。

ワークショップ：WS の概要

WS は全国各地（福岡[マリンワールド海の中道]、広島[広島市安佐動物公園]、大阪[大阪市天王寺動物園]、東京[東京都葛西臨海水族園]）で 4 回開催する。日程は未定。それぞれの責任者は福岡：高田、広島：大丸、大阪：山本、東京：坂本とする。特に大阪は責任者が開催園館の職員ではないため、連携を取りながら進める必要がある。各委員はそれぞれ一つの WS を担当し、4 名のグループで協力して実施する。平成 13 年度にその WS で実施されるプログラムを作ったものがいれば、中心となって活動してもらいたい。特に赤見朋晃は記録、赤見理恵は会計担当とする。中身の検討など、打合せは各 WS グループで行う。

WS は 2 泊 3 日程度の日程で行い、2 本程度のプログラムを実施する。1 日目に移動、2、3 日目に 1 本ずつのプログラムを実施するような形が妥当であろう。

WS のターゲットは開催園館の付近の園館職員や学校教員などを考えている。平成 13 年度に開発したプログラムが、その実施園館にふさわしいものかどうかは別問題だが、とりあえずは実践の場に落とすことが大事である。あくまでも技術移転が目的なので、平成 13 年度のプログラムにこだわる必要はないが、できれば使って欲しい。

WS の進行から、達成度を評価するためのアンケートなどの事後評価まで含めて、各 WS グループで検討する必要がある。12 月中に企画書、園館職員・教員向け各募集要項を作成する。打ち合わせには日動水 web サイトの会議室や ML を利用できる。

また、WS で実施するプログラム自体の評価を WS のアクティビティとして盛り込むことも大切である。教員との連携が可能であれば、評価も教員と連携して実施できれば望ましい。開催予算内で外部講師を呼ぶことも可能である。特に学校対象のプログラムなどは、授業の中で実施する意味から考え直していく必要があり、当然事前に学校教員と打合せをすることも必要だろう。既に来館予定のある学校や一緒にプログラムを実施している学校に提案するのがよいだろう。また、時間がないために、これから複数時間の授業として学校に取り組んでもらうことは現実的ではなく、授業一連の流れが大切ではあるのだが、単発的な取り組みとなってしまうため（単発であってもこの時期からは難しい）評価は難しいだろう。しかしながら、単発的な取り組みであっても評価は必ず必要で、その手法を含めて各 WS で話し合っていたきたい。

WS は報告書としてビデオを作成する予定である。また、それとは別に、SS と WS で一冊の報告書を作成する。

教育方法論研究会：EM の概要

EM では教育方法論を純粋に研究し、WS や今後の事業に反映させることを目的としている。計 8 回実施予定で、その内 4 回は外部講師を呼び、一般にも広報して公開する。基本的に東京での開催とする。

推進委員会の予定

計4回開催予定である。今回、事業スタート直前、中間、開催後に1回づつ開催する。必ずしも全員が集まる必要は無いので、各WSなどに応じて予算の範囲内で分科会形式で開催しても良い。

園館での教育事業とWSへの意見・提案

各地での素晴らしい取り組みが一般市民に広く知られていない。メディアリテラシーの問題である。知らせる努力が足りないために見てもらえず、そのため使いやすさも向上しない。大きなボトルネックになっている。但し、それはそもそも教育プログラムをしっかりと作成していない園館に多く見受けられる。プログラムをしっかりと作っている園館は広報もしっかりとやっている傾向がある。

園館の職員に教育プログラムを作る能力がないため、プログラムの作り方を狙いとした勉強会を行ってはどうか。まずは経験のあるものが実施してみせて、その前後にプログラムデザインの体験を行い、評価する。おそらく一般の園館職員が集まただけではいきなり評価はできないだろう。ましてやインタープリテーションデザインなどは不可能であろう。現状のままWSを実施してもWSにならないのではないか？

WSの開催園館はすでに内定しているが、既存のプログラムを持っている園館にメンバーが支援をしながら相談会を開いてはどうか？つまり既存のプログラムに新しい視点を盛り込んで、より良いものにしていくというWSである。それにより開催園館に負担をかけずに教育事業の大切さという気づきを持ってもらうことが出来るのではないだろうか？

プログラムを学校対象に実施する場合、WS参加者にはその経緯まで含めて解説する必要がある。しかしそのことで、WSがあまりに複雑で難しくなってしまうのは技術移転にならないだろう。

プロジェクトワイルドのファシリテーター養成講座では、テキストに書かれたアクティビティをそのまま実施できるだけでは不十分で、対象者にあわせアレンジするなど、最終的には自分でデザインできる能力が必要とされる。例えば、園館側が教員に対してこのプログラムをアレンジして実施して欲しいと提供したところで、教員は無理だろうと感じる。これらの作業は普段やっている人にとっては問題ないことなのだが、慣れていない人にとっては難しいものようだ。いかにこの作業をやれる人を作るかが、園館にとっては重要であろう。そのために園館外部の人と一緒に活動しながらプログラムを作成するというWSは有効であろう。そのようなWSとして2つの手法が考えられる。一つは、既存のプログラムを外部の人が自分たちのフィールドへあてはめるためにどうアレンジしていけば良いかを考えるWS。もう一つは、新しいプログラムを作成することで、プログラム作成のプロセスを体験してもらうWSである。どちらにせよ、WS参加者には、後ほどやってみようという気持ちになって欲しい。

何をもって技術移転とするのか、また、その先どこへ行くのかをはっきりさせておく必要がある。そのためにも、どんなメッセージが伝えられるか、それに対してどのような方法があるかを整理することが大事である。プロジェクトワイルドでも何を伝えたいかでプログラムを検索でき、とても整理されている。しかし、例えば多摩動物公園にはおよそ40のプログラムがあるが、普遍性があまりなく、全てをまとめて整理することは困難である。また、動物園と水族館を分けて考える必要もあるだろう。

WS のグループ

福岡 WS グループ：高田浩二、中嶋清徳、染川香澄、赤見朋晃

広島 WS グループ：大丸秀士、加藤由子、並木美砂子、赤見理恵

大阪 WS グループ：山本茂行、小林毅、松田征也、松井桐人

東京 WS グループ：坂本和弘、坂東元、佐藤哲

福岡 WS

2月20日 打ち合わせ

2月21日 9:30 集合

午前：学校対象プログラム「生物をかんさつしてみよう」

午後：反省会・ミニシンポジウム「学校との連携」に関して

2月22日 9:30 集合

午前：一般来館者対象プログラム「オリエンテーリング」

13:00 解散

マリンワールド海の中道(以下、マリンワールド)では学校と深く関わった教育事業を行っている。それをあまり前面に出しても、どこの園館でも実施できるものではない。テーマを手法的なものに絞って実施したい。例えば、事前・事後のアンケートの分析法など、評価方法を技術移転すると考えてもよいだろう。逆に、WS 参加者に各園館での課題などを聞いておくのも良いだろう。また、プログラム自身は子どもたちからも意見を吸い上げ、どのポイントを観察するかを決めていきたい。ミニシンポジウムではディスカッションできる場を設けたい。

広島 WS

2月17日 打ち合わせと下見

2月18日 体験学習法を知ってもらう

3月1日 午後：子どもたちを集めて、アイスブレイクなどを実施

夜：市の宿泊施設に泊まる

3月2日 午前：子どもたちが実際にプログラム「足型をとろう」を体験

午後：まとめ

足型をとる場所は子ども動物園に限る。プログラム参加者の子どもたちは事前に20名程度を一般公募し、1日(土曜)の午後から、2日(日曜)の正午まで預かる。WS 参加者には体験学習法とプログラムを評価する手法を知ってもらう。

大阪 WS

1日目 打ち合わせ

2日目 プログラム「解説パネルをつくろう」

3日目 同上

日程、時間などはまだ未定だが、広島 WS と東京 WS の間に実施する予定である。WS 参加者として学校教員も視野に入れるのであれば、学校の事情も考慮する必要がある。日動水では一般に対する広報はできないので、新聞等で行う。

WS 参加者は、2日目にどの動物舎でどのような解説パネルを作るかを考え、実際に作成する。

解説パネルは各参加者が作るのか、グループで作るのかは検討が必要。3日目に作成した解説パネルを掲示し、一般来園者に見てもらい、評価する。

詳細まではまだ未定だが、ある動物の情報をどのように人に伝えたら良いかを考えるWSとしたい。一般来園者の知りたいことと、園館職員の伝えたいことを比較して、その違いが見えてくると面白いだろう。これまでの解説パネルがどれほど主観的なものだったのかを理解してもらいたい。

WS参加者は、プログラムに参加し解説パネルの作り方を学ぶのか、解説パネルを作るというプログラム自体を学ぶのか、はっきりしておく必要がある。おそらくプログラム参加者として子どもを集めることはできないだろうから、まずは園館職員や学校教員対象に実施し、このプログラムを体験してもらおう方が良いだろう。つまり前者である。

どのようなパネルを作るかを考えるためには、現状調査や来園者への取材などが必要で、それはまともにやるとかなり大変だろう。現在の展示から読み取れる範囲で実施することになるだろうが、先にWS参加者の思いを裏読みし、作成するパネルに条件をつけても良いだろう。

パネルには本当に様々な種類があり、それによってパネル作成までのプロセスも多様に存在する。その辺りの話をきちんとしておかないと、WS参加者はどの部分を経験したのかははっきりと理解できないだろう。

東京 WS

3月13日の午後から3月15日の午前にかけて実施予定。

テーマは泳ぎと体の形に固定し、様々なメディア(ビデオ、ハイビジョン、ラベル、リーフレット、ハイブリッド水族館)を使ったアクティビティを実施して、その効果の違いを検証し、園館職員に対する技術移転を行う。WS参加者は来園者になったつもりでプログラムに参加し、良い点、悪い点に関してディスカッションを行う。事前学習の有無、事後学習の有無などでWS参加者を分けて体験してもらって、その効果の違いを話し合うという取り組みも面白い。

一般来園者は登場しないが、現場でガイドツアーを実施してもらうほどWS参加者を信頼できない。また、一般来園者のように知的好奇心が少ない状態にはなりにくいだろうが、そこまでの感情移入の必要性は必ずしも無いだろう。

対象動物としてペンギンも取り上げることで、動物園職員も参加しやすいようにする。

第2回 教育事業推進委員会 記録

2003年2月25日

福岡 WS の報告

事前学習：マリンワールドの職員が、福岡市立長丘中学校に出張し、中学1年生ークラスを対象に魚のヒレをテーマとした出張授業を行った。出張授業の前には学校教員による事前授業も実施してあった。

ワークシート学習：WS参加者は、園館職員、学校教員、出版社員など約60名が集まった。事前授業を受けた長丘中学校の生徒が来館し、ワークシートを用いて館内の観察を行い、WS参加者はその様子を見学した。同時にWS参加者自らも同じワークシートを用いて館内を観察した。

ワークシート解説：観察を終えた生徒に対して、マリンワールドの職員によるワークシートの解説が行われた。WS参加者はこの様子を見学した。

基調講演：福岡教育大の中野先生に、教育的ディスコースという切り口で、様々なりテラシーが必要とされる現代における博物館の役割に関してご講演いただいた。WS参加者からは新しい視点を学ぶことが出来たなどの感想が出た。

事例報告：長丘中学校教員、マリンワールド職員、宮崎市フェニックス自然動物園職員が、それぞれの立場から学校との連携の事例について報告した。園館職員の中には初めて指導案を目にする人もいたようだ。

WS[学習プログラム作り体験]：基調講演や事例報告を参考に、園館職員だけでなく、教員が参加して実際の声を聞きながら、教育プログラム作りを体験した。WS参加者は15人ずつ4班にわかれ、班毎に独自に進行し、作成したプログラムの発表までを行った。この班の人数は15人が限界であろうという判断と、ホールの収容人数の関係からWS参加者を60人とした。プログラムは全く白紙の状態から作成した。各班内で自己紹介をるところから始まり、各班でリーダーを一人決定し、そのリーダーを中心にテーマを出し合うなどして進めていった。既にプログラム作りの経験がある学校教員がアドバイザーとして各班に参加し、助言を行った。使用する展示は特に指定しなかった。対象をどの学年にするかは学校教員の具体的な意見を聞きながら決めていった。寸劇仕立てでの発表もあるなど盛り上がりを見せた。参加者は学校教員と協力してプログラムを作ることの大切さを学んだようだ。また、普段は一人で考えることが多く、複数の人たちと話し合っってプログラムを作るという経験もあまりなかったようだ。スタッフとしてもどうやってプログラムが出来ていくのかを目の当たりに出来て、大変興味深かった。反省点としては、話し合い時間が少なく、予定よりも30分延長して終了したが、質疑応答の時間も取れなかったことが大きい。このWSだけを2日かけて実施してもよかったのかもしれない。さらに、間に懇親会を設け、WS参加者間のコミュニケーションを深めることができれば良かった。また、金曜開催だったため学校教員に参加していただくのが大変だった。

ビンゴオリエンテーリング：館内のクイズを解いてまわり、正解の数字を白紙のビンゴカードに書いていき、最終的に参加者独自のビンゴカードを完成させる。10:00に開館し、45分で170枚を一般来館者に配布した。12:30よりビンゴカードを受け取った一般来館者がほぼ全員参加して、クイズの解説を兼ねたビンゴ大会を行った。ビンゴがそろった参加者には先着50人までサメの歯を景品として渡した。7、8問目辺りからビンゴが出始め、その後1問毎に5~10人程度のビンゴが続き、20問目辺りで50人に達した。混乱を避けるという目的で、ビンゴになった参

加者には整理券を配布し、最後まで解説が終わった後、景品と交換した。その結果、最後まで解説を聞いてくれた参加者が多かったように思う。また、解説が終わったクイズパネルをホール横に並べて、自由に見ることができるようにした。

広島 WS の進行状況

2月17日に広島市安佐動物公園（以下、動物公園）で打ち合わせを行った。WS参加者は、WS全体を通した起承転結の中の「転」の部分で、実際に子ども（一般来園者）を対象にプログラムを実施してみるという構造にする。

スタッフが9名（委員4名、記録1名、動物公園職員1名、生活指導係3名）で、WS参加者は23名集まっている。プログラム参加者の子どもたちは、地元新聞に掲載されたこともあって400名強の応募があった。その中から59名（男:女=1:2）が参加する。

初日：正午過ぎに集合し、WS参加者は体験学習法について実技を交えながら基本を学ぶ。宿舎でも2時間ほど翌日の説明などを行う。

2日目：午前中に2時間ほどインタープリテーションについて学ぶ。午後からは使用する動物や施設について解説を受ける。その後、子どもたちが参加する。子どもたちは5人づつグループに分かれる（動物の足型をプリントしたものを渡し、リーダーが真似る動物の元に集まる）。その後、各グループにリーダーとして2人づつついたWS参加者を中心にアイスブレイクを行い、動物の扱い方を飼育係に教わりながら少なくとも4種類の動物に触る。夕方からは宿舎に行き、どうしたら足型を取ることができるかを、グループ毎に話し合い、計画表を作成する。

3日目：実際に足型取りを行う。最後に展示会を開催し、ふりかえりに代える。午後はWS参加者のふりかえりとして、委員にも参加してもらいミニシンポジウムを行う。

足型取りのプログラムは、3日間を通して、事前学習から事後学習までを圧縮した形で行う。

大阪 WS の進行状況

現在のWS参加者応募数は56名で、内訳は園館職員18名（ほとんどが動物園職員）、学校教員3名、残りが一般市民である。学期末で教員の参加が難しいようだ。主催を日動水とし、大阪市天王寺動物園（以下、天王寺）と大阪市動物園協会を共催として広報して良いただろう（福岡WSでは主催日動水・開催館マリンワールド、広島WSでは主催日動水・共催動物公園とした）。

天王寺の高見さんと、松本朱美さんに実際の進行は願います。京都精華大学デザイン科の先生と、NPO「おんなの目で大阪の街を創る会」の方にも参加していただき、作った解説パネルのメッセージがどのように第三者に伝わるのかを、参加者間で話し合って検証する。1つ目のねらいは、動物解説パネルを作るというプログラムの検証と発展である。2つ目のねらいは、同プログラムの他園館への普及である。現在はどの展示の前で実施するかが決まった段階で、これから使える道具などを検討していく。また、WSの内容の検討の大部分は松本さんをお願いしており、3月10日にもう少し詳細な打ち合わせを行う予定である。

WS開催中の一般来園者へのケアを行わなければならない。一言WS開催中との案内を作るだけでも違っだろう。

東京 WS の進行状況

初日に、現在葛西臨海水族園（以下、水族園）で実施しているオリエンテーリングを見学する。

2日目に、オリエンテーリングのクイズにテーマ性を持たせるといった工夫など改善策を検討する。来園者調査など評価検証も行う。WS参加者が実際に何かを行うことを目指す。3日目の午前中にまとめを行い、その後SSへ移動する。オリエンテーリングは一般来園者も気軽に参加できるため、来園者の22~24%程度が参加することもあり、マスに対する教育プログラムとしての潜在能力が高い。また、クイズを考えることになどボランティアの協力も得やすい。WS参加者は主に日動水加盟園館の教育担当で、現在関東の園館のほか、中部の3園館からも応募が来ている。定員は24名とする。3~4班で作業にあたり、他園館との共同作業を行うことで、技術移転が可能となるだろう。全体の進行は坂東が行う。時期的にオリエンテーリングに参加するために学校が来館することはできないだろう。

SSの進行状況

学校と園館の連携をテーマとする。

現時点での応募状況は、園館職員約50名、一般市民20名だが、これから教育新聞など各種マスコミで広報されるため、まだ参加者は増えるだろう。メール版の案内を作成しMLに送信するので、広報に利用して欲しい。メールに記載する申し込み先は、日動水のFAX番号と、多摩動物公園のメールアドレス(tama-zoo@po.gws.ne.jp)とする。参加無料を明記する。

当日は発表要旨集を配布する予定である。前日に葛西臨海公園で準備作業を行うので、それまでに要旨集の版下を作成しておく。また、講師・コメンテーター間での意思疎通が重要であり、発表要旨をあらかじめ送るなどして対応したい。3月7日17:00よりサンケイプラザにて詳細な打ち合わせを行う。発表者の機材確認が必要だろう。

報告書に関して

SS、EMではそれぞれ報告書の冊子を作成する。WSはビデオを作成し報告書とする。これまでの報告書は400部作成し、180部を園館へ、200部程度を関係施設へ送っているがほとんど見られていないという現状である。園館長会議の資料とまとめて送付されてしまっている。本当は、園館の教育担当者宛てに送付できれば良いのだが、教育担当者が特定できる園館は半分くらいしかない上、日動水の会員はあくまでも園館長であり、教育担当者へ直接送付することは難しい。日動水から送付しないという方法もあるが、それも難しいだろう。良いアイデアはないだろうか。

紙媒体よりも電子媒体、それもインターネットでの配信の方がよく読まれるのではないだろうか。平成12・13年度の報告書は日動水のwebサイトに掲載済み(URL: http://www.jazga.or.jp/kyouiku_p/top.htm、http://www.jazga.or.jp/kyouiku_th/)である。かなり見やすくなっているが、園館職員にはあまり知られていない。

事後アンケートを行い、報告書の利用状況を把握してはどうか。そのアンケート自体により利用促進が可能なのではないか。

日動水ブロック研究会でのデモンストレーションを行う。但し、飼育研究会などでは教育関係の話は聞いてもらえないという問題もあるため、webサイトなどの案内を配る程度の方が良いかもしれない。

月報でのアナウンスを行う。但し、間もなく紙媒体の月報は廃止される。

3年度分の活動をまとめた普及版チラシ(A4×1枚)を作成し、ニュースレターと共に送る。これから行うWSで周知する。

第3回 教育事業推進委員会 記録

2003年3月16日

広島 WS の報告

一般市民からは450名くらいの申し込みがあり、大変盛況だった。一般市民に対するアピールもうまくいったと言えよう。当日もホームテレビやNHKの取材を受けた。

WS参加者には、子どもを先導するリーダーとして活動してもらい、子どもに発見を促すことが重要であることに気づいてもらえただろう。その手法として、つかみやふりかえり、アイスブレイク、アクティビティなどを理解してもらえた。これらの手法を共通の言葉として使えば、今後の教育プログラムを考える際に話しがしやすくなるだろう。

大阪 WS の報告

3月11日、12日の2日間で実施した。WS参加者は50人で、内、園館職員20名、学校教員3名、それ以外は一般市民である。5~6人づつ9つのグループに分かれて作業にあたった。当初は時間の制約もあってパネル完成までこぎつけられないのではないかと心配していたが、思ったよりもすんなりと作業に入れた。出来上がったパネルはバリエーションに富んでいて、非常に凝ったものもあった。

良いパネルを作ることが目的ではなく、作業を通して様々なことを学ぶことが目的であった。異なる立場の人が集まることで、視点の共有が出来た。また、ターゲットの設定や評価も行ったが、一般来園者は幼稚園の遠足がほとんどで、実は非常に凝ったものを作っても、利用者は理解できないということが判明したりと、いろいろな反応を見ることができた。全体でのふりかえりでは、WS参加者全員が話しきれない部分もあったが、班毎に改善のための検討がなされたようだ。タイトなスケジュールの中で、参加者はそれぞれに様々なことに気づいただろうが、参加者自身が自分の言葉でそれを表現するためにはもう少し時間が必要だった。また、天王寺の職員も様々なことを感じてくれたようだ。参加者の中には、自分の園館でもこのプログラムを実施したいと言う人もいた。

このWSの実施体制としては、開催園館の職員が委員の中にいないということで、細部にわたってのつめが難しかったのだが、逆に良い面もあったようだ。

東京 WS の報告

3月13日から15日にかけて実施した。現行のオリエンテーリングプログラムを、WS参加者がよってたかって改善するというWSとなった。参加者は園館職員のみ15園館16名で、内、動物園職員7名、水族館職員9名となった。3班にわかれ、オリエンテーリングの問題を3問づつ改善した。問題の対象となっている動物は変更せず、クイズの内容や表示の方法を検討した。オリエンテーリングはセルフガイドのような形式で各園館で実施されており、WS参加者も何かしらの経験があった。そのため様々な意見が出され、オリエンテーリングのやり方全般に関して改めて考えさせられ、多くのことに気づかされた。改善したオリエンテーリングを実際に一般来園者対象に実施し、会話聞き取り、滞在時間追跡、解説後のアンケートで評価を行った。評価も問題改善とは別の班に分かれて実施した。データをとるといふことの難しさが改めて認識されると同時に、その重要性も確認された。また、並木より来館者調査の実際について講演をした。実施し

た調査は本当にこれで良いのかという部分がすっきりと解説された。

集い合い、話し合うという WS の形をとったことが大事である。WS を進めるための方法を学ぶ WS であり、その意味では開催園が一番勉強となったと言える。

SS の報告

参加者は 153 名で、会場は適切であった。後ほど参加者名簿を作成し、ML へ送信する。

会計報告

多少計画とのずれはあるもののおおむね問題ない。

平成 14 年度事業の反省

4 箇所での WS、SS を通して各地で教育事業の推進という種をまくことができただろう。今後とも各方面に働きかけて、事業を持続していきたい。今回の経験をした人が各地にいるため、積極的に連絡を取っていければよい。

報告書に関して

ビデオテープ 1 本と冊子 2 冊、送り状を併せて各園館に送付する。これからの作業内容としては以下のようなものがある。

- ・ SS のテープ起こし
- ・ WS 記録の作成
- ・ ビデオテープの編集（最大 30 分程度）
- ・ ビデオテープ用ナレーションの作成
- ・ EM の報告書用原稿作成

おわりに

動物園・水族館における教育事業を立ち上げたい、教育活動を展開させたいという委員会の目標は、今やっとスタートラインに立ったという気がする。これまでの活動の成果が、ドアを開けて外に向かっての一步を踏み出したところだ。ドアの外に、どんな道を切り開き、どういうふう歩いていくか、それが今後の課題である。

3年間の調査研究の区切りとして本年度、ワークショップが実施できたことは、非常に大きな成果だった。これまでの、「他の園館が行なっているものを見に行つて参考にする」から、「一同に集まって皆で考え、そこで生まれたものをそれぞれが持ち帰る」という方法があることを、参加者は感じたのではないかと思うからだ。各園館が個々に孤軍奮闘することはない、プログラムだけでなく人材すらも、ある意味で共有化できるのだということを感じたのではないかと思うからだ。皆で、各地で、教育活動をともに展開させていくのだという連帯感も生まれたと思う。これらは、全国レベルで考えた場合の教育活動の底上げと発展に必ずや、つながることであろう。

今後も、できる限り、ワークショップを実施していきたい。とくに、教育プログラムをまだ実施したことがないが、ぜひやりたいという園館でのワークショップを行ないたい。その園館に合った切り口や方法を、さまざまな分野の人間が考え、ともに実施することで、真の共有化と幅が生まれる。定着化への近道でもある。ただし、誰かが自分の園でのワークショップを願ったとしても、それを実現するには、さまざまな困難があることは想像にかたくない。そのための環境づくりのノウハウも含め、今後の課題としていきたい。

動物園・水族館の教育事業の真の発展のため、今後も幅広い調査研究と活動を続けていくつもりである。

教育事業推進委員

- 石田 おさむ (東京都多摩動物公園)
大丸 秀士 (広島市安佐動物公園)
松田 征也 (滋賀県立琵琶湖博物館)
山本 茂行 (富山市ファミリーパーク)

調査研究委員

- 赤見 朋晃 (有限会社ズーサポートネット)
赤見 理恵 (東京大学大学院農学生命科学研究科/市民 Z00 ネットワーク)
加藤 由子 (著述業/ヒトと動物の関係学会)
小林 毅 (株式会社自然教育研究センター)
坂本 和弘 (東京都葛西臨海水族園)
佐藤 哲 (WWF ジャパン)
染川 香澄 (ハンズ・オン プランニング)
高田 浩二 (海の中道海洋生態科学館)
中嶋 清徳 (名古屋港水族館)
並木 美砂子 (千葉市動物公園協会)
坂東 元 (旭川市旭山動物園)
松井 桐人 (横浜市立よこはま動物園)

50 音順

書名：動物園・水族館の教育を考える シンポジウム・ワークショップ報告書

発行：社団法人 日本動物園水族館協会

編集：社団法人 日本動物園水族館協会 教育事業推進委員会
有限会社 ズー サポート ネット

住所：〒110-8567 東京都台東区台東 4-23-10 ヴェラハイツ御徒町 402

電話：03-3837-0211

URL：<http://www.jazga.or.jp/>

発行年月日：平成 15 年 3 月 31 日